

音楽活動による認知症高齢者の会話応答潜時の変化

A Change of Response Latency in Conversation by Music Activities in Demented Elderly Peoples

○田畑きみ代・真邊一近

Kimiyo TABATA and Kazuchika MANABE

日本大学大学院総合社会情報研究科

Graduate School of Nihon University, Human Science

I. 目的

高齢者施設で人と上手くコミュニケーションがとれない、あるいはQOL・ADLの低下が顕著であると思われる認知症患者が、音楽活動中には笑顔で歌っている様子を見ることがある。本研究では、音楽活動により、認知症高齢者の会話反応が変化するかどうかを検討することを目的とした。

II. 方法

実験参加者：認知症高齢者3名（全員女性）、Yさん(84歳)、Sさん(77歳)、Iさん(80歳)で、平均年齢は80.3歳であった。

実験デザイン：マルチベースラインデザインを用いた。仮説 音楽活動後は会話反応時間が短くなり、また会話理解度が増す。

手続き ベースライン期および介入期において、5項目の問いかけに対する反応を記録した。問いかけは、1)おはようございます（こんにちは）、2)お名前を教えてください、3)お歳は何歳ですか、4)お家はどこですか、5)お誕生日はいつですか、という5項目の質問であり、常時同じスタッフが1人ずつ問いかけた。毎週水曜日午前10:20（朝）と11:40（昼）に会話反応を記録・録画した。ベースライン測定を、Yさんは3回、Sさんは4回、Iさんは5回実施した。介入期には、音楽活動を行った。毎週水曜日の午前10:30～11:30までの1時間、3名の実験参加者を含め、約60名のグループで、歌、リズム楽器の演奏などを行った。使用した歌は、昔の記憶を回想させ、季節感を感じ、発声・発語・発話を促すことを目的として、実験参加者にとってなじみの歌を使用した。また、ハンドベルを利用し、音楽に合わせて軽い体操を行った。

反応の測定は、1) 応答反応潜時と2) 会話理解度について行った。反応潜時録の測定は、録画された音声付の画像を元に実験者がストップウォッチを使用して測定した。会話理解度測定は、5名のスタッフで行った。

測定基準は下記の4項目で行った。

- ア 無反応
- イ 見当外れな返事
- ウ 質問内容には添っているが正解ではない
- エ 正しい返事

III. 結果・考察

音楽活動の長期的効果として、介入前より介入後は、Yさんは5つの質問項目中3項目、Sさんは全項目、Iさんは4項目に音楽活動後は応答反応潜時が短くなった。ただし、介入後6回測定出来たYさんをのぞいて、統計的に有意な差は認められなかった。また、短期的な効果として、3名の被験者全員の「お家はどこですか」「お誕生日はいつですか」に対する応答反応潜時は、ベースライン時に比べて音楽活動導入後に、朝より

り音楽活動後の昼の反応潜時がより短くなり、音楽活動の短期的な効果が認められた（Fig.1 参照）。

音楽活動後の会話の理解度については、短期、長期とも顕著な効果が認められなかった。

音楽活動は発声や、腕を動かすなどの身体活動を伴うため、生理的に活性化され、会話応答反応潜時が短期的に短くなった可能性が考えられる。また、なじみの懐かしい歌を歌うことから、記憶が短期的に活性化される可能性が指摘できる。しかし、今回の様な状況下では会話理解度を増進させるまでの影響力はないと考えられる。今後は、より長く音楽活動を行った場合の長期的効果の検討が望まれる。

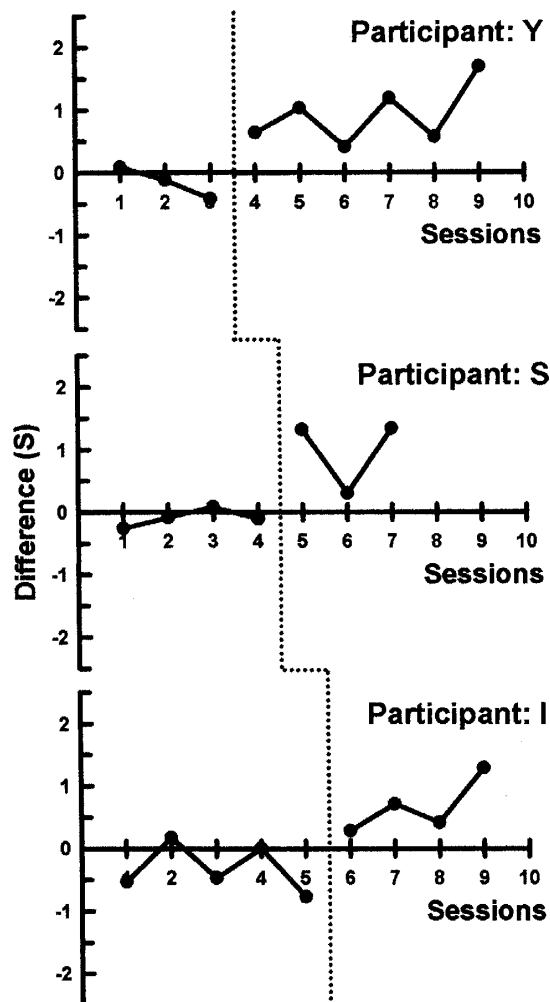


Fig. 1. Difference in response latency (S) of participants to an inquiry about participants' birthday between morning and noon sessions. The differences were calculated extracting latency at noon from latency at morning. A dotted line denotes a transfer from baseline to intervention.